

巻頭言

「季節の変わり方で考えたこと」

理事長 新谷 友良

沈丁花が匂って、冬が確実に春になります。芭蕉の「梅が香にのっと日の出る山路かな」の名句から、梅の匂いが春を代表しますが、個人的には雨上がりの沈丁花の匂いが、鮮明な春の匂いです。そして、秋の深まりは金木犀の香りが知らせてくれます。

匂いは人の記憶を目覚めさせます。人によってさまざまですが、目や耳が記憶を呼び起こすより、匂いが呼び起こす記憶は有無を言わせない直接的な感じを持ちます。沈丁花の匂いは、大学時代4年間続いたクラブの小豆島での春の合宿につながります。3月下旬の瀬戸内は溢れるばかりの陽光で、それだけでなく春の盛りなのですが、1週間続く合宿には1日ぐらいの雨の日があって、泊っている旅館の庭の沈丁花が濃く匂いました。

2月の協会の「人工内耳に関する講座」で、国際医療福祉大学の城間先生から、「空耳の科学」（柏野牧夫著）という興味深い本を紹介いただきました。そこでは「音には素早く古い脳にある扁桃体に伝わる経路があり、感情やとっさの行動などを制御している」と書かれています。「古い脳」というのは老人の脳ではなく、動物の生命や情緒的な活動に係る「脳」のことです。一方、言葉を理解したり、会話をしたりするのは比較的高度な人間の活動なので、「聴覚野」といわれる「新しい脳」が担当しており、通常の音はこの「聴覚野」に伝わって処理され、理解されるとあります。

このことを読んで、匂いもこの「扁桃体」に関わっているのではないかと思ってウィキペディアを調べると、「嗅(覚)細胞と対象の分子が結合すると電気信号が発生し、この電気信号は嗅神経を経由し嗅球へと伝わり、さらにここから扁桃体などに伝わって、色々な情報処理をされて臭いとして認識される」とありました。また、「嗅覚は視覚や聴覚に比べると、記憶を呼び起こす作用が強いと報告されている」ともあります。

五感のうち、触覚、味覚、臭覚は「腐ったものは食べない」など、生命の維持そのものに関わる面が大きいので、時間をかけた判断は許されず、人の感情や行動を直接左右する面が大きいことは容易に想像できます。一方、聴覚や視覚は生命維持に関わる部分と、それを超える知的な活動に関わる部分が拮抗しているところがあり、そのような拮抗が言葉や音楽、絵などを生み出したのではないかと、勝手に想像しています。